

6歳のとき長崎で被爆

私は1939(昭和14)年5月24日、台湾の高雄で生まれました。林兼(大洋漁業の前身)の遠洋漁船の機関長だった父は、船ごと召集されてしまいました。1944(昭和19)年には台湾も空襲が激しくなり、母と私、妹、弟の4人は長崎に向かう船にやっと乗り込むことができ、佐世保の港に引き揚げました。

1945(昭和20)年、両親の仲人を頼って長崎へ。そして8月9日、爆心地から1・8キロのところで被爆しました。原子爆弾が落とされた日、私は家の前で近所の子とままごとをして遊んでいま

〈22〉 焼けただれ、苦しむ姿が忘れられない



「地球上から核兵器をなくすために、みなさんと力を合わせてがんばります」と富田さん

東京・葛飾区 富田芳子さん(77)

した。「防空壕に入れ」と言われ、その前にトイレに入った瞬間、突然ピカッと光ったと思ったら窓からきれいな七色の光がぱあっと落ちるのが見えました。ドーンとすごい音がして家がぐらぐらと揺れ出し、母の「伏せなさい!」という叫び声で、その場に伏せました。少し落ち着いてから裏の防空壕に行くと、運ばれてきた人たちは全身焼けただれ、鼻は溶け、目は飛び出して垂れ下がっていました。

つづれずに助かった近所の家は病室代わりとなり、妹は寝かされた人の体からわいたウジ虫をピンセットで取り出し、私は死体を燃やすためのまきを集めました。

49歳で亡くなった母

1週間たってもあちこちで煙がくすぶり、焼けただれた町の中からは、

「水、水…!」助けて」という、腹の底から絞り出すようなうめき声が聞こえました。私たちは、母の姉を頼って五島列島の津和崎に避難しました。12月には父が病人のような姿で帰ってきました。父は前の会社に復職でき、私たちは社宅に移りました。

にしない。障害をもった子が生まれたとしても自分たちで育てよう」と言われ、結婚を決めました。

1967(昭和42)年に葛飾区の被爆者団体・葛友会に誘われ、被爆体験の「語り部」として小学校や中学校、地域で活動を始めました。それは、自分が被爆者であることをきちんと認識して向き合っていかなければ、現在の被爆者がどんな状態かというニュースも入ってこない、また、当時6歳だった私が何もできず、死んでいく人を見殺しにした申し訳なさを感じていて、それを少しでも和らげたいの思いかでした。

焼けただれ、苦しんで死んでいった人たちの姿が忘れられません。私自身、子どもに遺伝したらどうしようという不安を抱えてきたし、弟は30代で白内障、妹は3年前に乳がんを患い、心の病でアルツハイマーになるなど、被爆の重荷を背負ってきました。

「語り部」として

私は東京で就職し、26歳で結婚。結婚相手に長崎で被爆したことを話すと「被爆したのはあなた

核兵器は絶対に使ってはいけない、悪魔の兵器です。核廃絶は被爆者の願いです。そのためにはどうしたらいいのか、人間の知恵を働かせなければなりません。

(葛飾支部かまくら班)